

唐丹の民話・18話「本郷地区」

本郷・大曾根の

宇賀倉さま



平成19年6月

唐丹・愛ちゃんネットパソコンクラブ

目 次

一本郷・大曾根の宇賀倉さま―

唐丹民話の再話著作にあたって	2
1. ご利益多き神さま	4
2. ご神木は桂の木	4
3. お宮を要らないという神さま	5
4. 龍神さまが現れたか?	5
5. 山椒カツカ (サンショウウオ) は、はら痛の薬	6
6. 宇賀神 (豊作・豊漁の守護神) について (参考)	7
(1) 仏教では	7
(2) 日本神話では	7
(3) 宇賀神は諸説多し	7
7. 大正2年の大火について (参考)	8
(1) 延焼くい止め、心に安堵	8
(2) 埋もれ火が、紅蓮の炎の海と化して	9
(3) 猛火に、ただぼう然、成す術なし	9
(4) 明治の大津波から18年後の大惨事	10
<追記>	
大火の体験談聴き取り者：再話著者	11
その1. 父政治郎の姉ナカノ伯母 (明治37年生れ) 9歳の頃の話	11
その2. 母ハルの兄石本一雄伯父 (明治42年生れ) 6歳の頃の記憶	11
その3. 大正2年大火の鎮火祈願歌・大石部落	11

唐丹民話の再話著作にあたって

唐丹公民館の自主パソコンクラブ（設立：平成17年6月／名称：唐丹・愛ちゃんネットクラブ）では、パソコンによる文章作成を習得した証と民話を伝承する狙いを含めて民話の再話著作活動を実施しました。

文章作成の教材は、釜石民話の会（平成2年発足）の機関紙「釜石民話」を活用させていただき、この中から、唐丹に関係し、かつ再話できるものを選び。その根底にあるものを変えないことを基本に「見やすく」、「読みやすく」、「分かりやすく」するために小見出しを付け、写真や絵図などを挿入。できるだけ、関連する歴史や実話を織り込みながら再話著作しました。

いつの日か、この冊子が誰かの目に留まり、唐丹にもこんな話があったのかと唐丹の「いにしえ」に想いをはせる一助になれば幸いです。

おわりに、この活用させていただいている民話は、釜石民話の会会員でありました唐丹町片岸の加藤ムツさんが採録（聴き取り）したものであり、第1集から第6集に掲載の民話の数は92編を数えます。

加藤ムツさんの民話を伝承したいという、この熱意と努力に敬意を表するとともに、故人となられました加藤ムツさんのご冥福をお祈り申し上げます。

なお、この民話の「本郷・大曾根の宇賀倉さま」は、釜石民話第3集「龍神社」を再話著作したもので、その「龍神社」の原文は次のとおりであります。

本郷の大曾根の部落に曾根さんという方がおられます。

其の所に、龍神様「うかう姫」を祀る御神体は桂の大木が（で？）あります。昔は男帯8本もまわらないような巨木であった。明治29年の津波にも流されずに残ったが、大正2年に甲子方面で出火した火が延々と燃え広がり唐丹の山をなめつくした。

その時に、この桂の巨木も焼けたけれど、生命力強く脇から芽吹き、今では大人が手を広げてもまわらない大木になっております。

この神様にはお宮がなく、木杵だけあって信者が奉納した剣が沢山祀っております。

明治8年に立派な錦織の幟（のぼり）が3本も上り、其れは、行李にぎっしりと詰め家に納めてあります。御縁日は旧暦4月28日になっているので家から持ち運び、幟を上げているそうです。

神域の聖冷なる水の流れる小川があり其の所に、「山椒かつか」が住（棲？）んでおり、昔は、お腹のいたい人がもらいに来たものだそうです。今は数も少なくなり春の御縁日の頃になると姿をみせてくれるそうです。

昔、近くに製材所があり仕事が終われば働いている人々に酒を振るまっておりました。

或る日、みたことない人品にいやしからぬ男の人が来たので、その人にも一杯の酒を上げました。其れから製材所は繁盛し店を市内に持つようになり、あの日の男の人は竜神様だったのかと、鳥居をあげお礼し毎年お神酒上げに参るということです。

本郷 曾根としえさんの話

本郷・大曾根の宇賀倉さま（通称：おかくらさま）

1. ご利益多き神さま

宇賀倉さまの別当は、本郷部落大曾根の屋号井戸端の曾根家です。

宇賀神（うかのかみ）を祀る宇賀倉さまは、澤山（さやま）の麓にあり、すぐ脇をきれいな澤山川が流れています。

祭神は、龍神さまや水神さまといわれ、商売や縁結びにご利益があるといいつたえられています。

明治8年に、信者さんより立派な錦織の御旗（幟）があがり（献納）しました。御縁日は旧暦4月28日で、縁日には、その御旗を揚げています。



（澤山周辺・大石方面より望む）

2. 神木は、桂の木



神木は、桂の木です。昔この桂の木は、男手8人でも回らないような株立ちの巨木で、その幹の洞（うろ）に神さまが祀られていたといわれています。

この桂の木は、明治29年の大津波にも流されず残りましたが、残念ながら大正2年に、鍋倉牧場の野火の残り火が燃え広がり、唐丹をなめつくしました。

（詳細は、後述7の大正の大火について《参考》の項参照）

（←神木群：桂・さいかち）

そのとき、この桂の巨木も焼けて傷んだが、生命力たくましく、その幹や根っこから芽が吹き出て、今では、大人が手を広げても回らないくらいの大木になっています。

(一番大木の桂の目通り周部分→)



3. お宮を要らないという神さま

昔々、ある信心深い人が、お宮を造ってあげました。つぎの朝、お参りに行ったところ、不思議なことに、そのお宮がこつ然と消えていました。



(社が井垣の宇賀倉さま)

地元の人たちは、驚き、おののき「この神さまは、お宮はいらないということなんだ……」。と口々に語りあったそうです……。

今も、この神さまには、お宮はなく、社（やしろ）の原形の囲垣（いがき）のままで、信者さんがあげた剣が沢山祀られています。

4. 竜神さまが現れたか？

昔（昭和20年代頃）、神社の脇を流れる澤山川の上の方に製板（移動製材所）がありました。人の好いそこの主人は、仕事が終われば働いている人たちに、ご苦労さんと感謝の酒をふるまっていました。



(社脇の澤山川の清流)

ある日、通りかかりの見慣れない男の人にも、一杯の酒をあげたところ、大変よろこんでお礼をいい、いずこともなく立ち去りました。

それからの製板は、ますます栄えて釜石の町にも店を持つようになりました。

主人は、大変よろこんで、あの日に見慣れない男の人は、もしや、「龍神さま」ではないかと思い、お礼に鳥居をあげました。

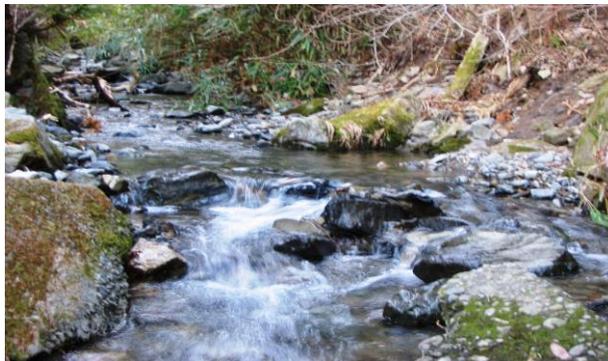
その後も、信心深く、一族の人は、毎年神さまに来てお神酒やお供えを手向け、お礼参りをしています。



(宇賀倉さまの鳥居)

5. 山椒カツカ（サンショウウオ）は、はら痛の薬

神社のほとりに、澤山の奥から流れくる澤山川があり、山椒カツカが棲むほどきれいな川です。



(神さま下方の澤山川の清流)

山椒カツカは、腹の痛い人が飲むと治るといい、もらいに来た人もいました。

今は数も少なくなりましたが、春の御縁日のころになると姿を見せてくれるなど、四季おりおりの景色もきれいで静かなところ です。

ただ、残念なことに山椒カツカが少なくなったことです。

昔からこの川には、イワナがいなかったが、いつごろ誰が放したか目につくようになりました。多分、イワナの餌食になったようで近年激減しました。どこでも、絶滅の危機にあるようですが……。



(参考：ほくりくサンショウウオの図)

物語は、おしまい

6. 宇賀神（豊作・豊漁の守護神）について（参考）

（1）仏教では

仏教で、すべての衆生に福德を授け、菩提に導くと信じられた福神で「うかじん」ともいう。

宇賀神の宇賀は梵語の「宇賀耶・うがや」がもとになっており、それを訳した「財施・ざいせ」からきて**福神**とされたという人もいる。

財施というのは仏教用語でいう三施の一つで、仏や僧侶、または貧窮している人などに物品や金銭を施すことをいう。

（2）日本神話では

日本神話では、食稻魂命（うかのみたまのみこと）・（稻魂命）や保食神（うけもちのかみ）と音が似ているところから、これと同一神ともされている。

食稻魂命は、宇迦之御魂命（うかのみたまのみこと）とも書き、素盞鳴尊（すきのおうのみこと）と神大市比売命（かみおおいちひめみこと）との間にできた御子である。

「うか」は「うけ」に通じ、食物を意味して、食物の魂、すなわち**食物を司る神**とされている。

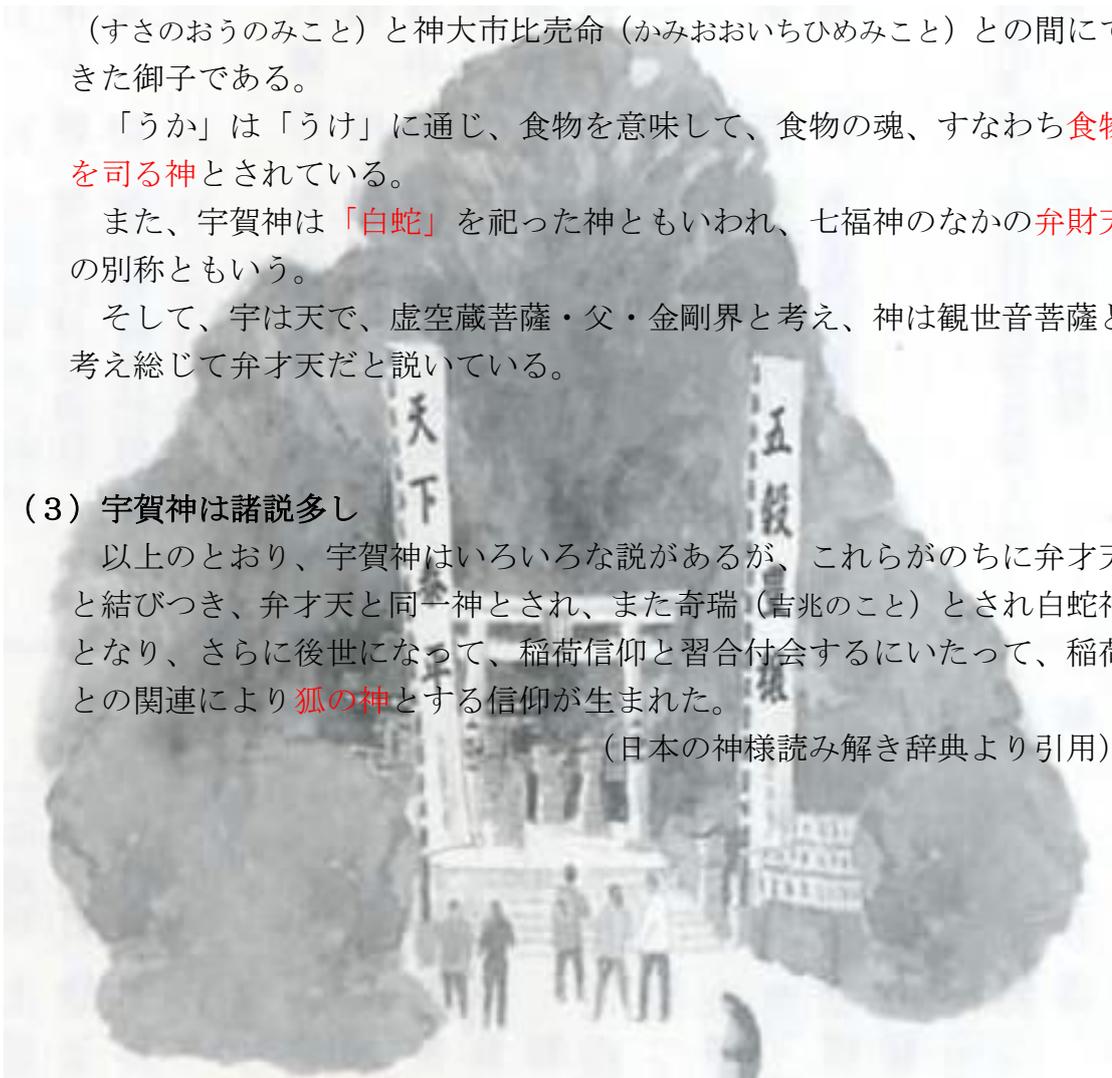
また、宇賀神は「**白蛇**」を祀った神ともいわれ、七福神のなかの**弁才天**の別称ともいう。

そして、宇は天で、虚空蔵菩薩・父・金剛界と考え、神は観世音菩薩と考え総じて弁才天だと説いている。

（3）宇賀神は諸説多し

以上のとおり、宇賀神はいろいろな説があるが、これらがのちに弁才天と結びつき、弁才天と同一神とされ、また奇瑞（吉兆のこと）とされ白蛇神となり、さらに後世になって、稻荷信仰と習合付会するにいたって、稻荷との関連により**狐の神**とする信仰が生まれた。

（日本の神様読み解き辞典より引用）



7. 大正2年の大火について（参考）

（1）延焼をくい止め、心に安堵……

毎年4月ころになると、県下一帯の牧草地には「火入れ」と称して枯れ草を焼いて、新草の繁生を図るのが常例で、これを俗に「野火」といっている。



（平成19年4月の鍋倉山周辺）

大正2年のこの季節は、晴天続きで山も里も乾ききっていた。

唐丹では、山谷部落の西北にある鍋倉牧場に3月31日に火入れしたが、夕刻頃から五葉山方面より強い風が吹いて、野火は牧場を越えて村有林に移った。このため、山谷、川目の人々は、非常出動をして消火に努め、一応延焼を防ぎとめた。



（山が燃える大火事の想像写真）

そして、僅かに松の老木の根元がくすぶる位で、他に延焼もないようであった。

やがて、夜ともなり一同は、だれともなく、それぞれ帰宅してしまった。

(2) 埋もれ火が、紅蓮の炎の海と化し

ところが、不幸にも夜半から烈風がまた吹きだしたため、松の根元の残り火が勢いをもり返し、忽ち炎となって風下の樹木に飛び火し、見る見るうちに、村有林に拡がって火の海になったのである。



(火が民家に延焼、逃げ迷う人々の想像写真)

このことを夜明け方に発見した部落の人々は、猛火に驚くともに、手の施す術もなく、今は急を風下の川目、小白浜、本郷に告げ警戒をするよう告げた。

強風にあおられた火はどンドンと延焼し、またたく間に小白浜に移り、当然、民家にも延焼し、全く火の海と化した。

(3) 猛火に、ただぼう然、成す術なし

特に、小白浜は、すぐ前が海で、民家の後は山という地帯であるので避難場所というと海上より外になく、全く危険な状態となった。



(往時の焼け跡を残す宇賀倉さまの桂の根っこ)

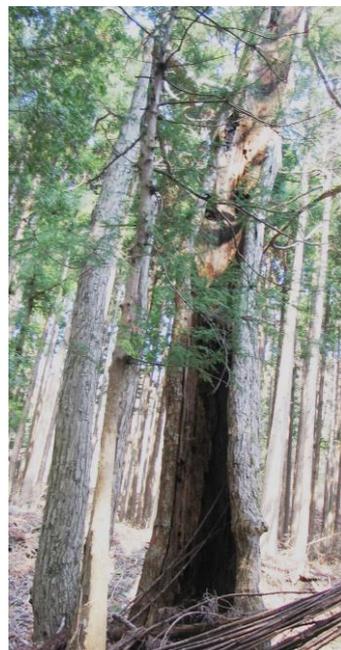
村民は、ある者は海上に船で避難。また、片岸の川原に老人、子供達が避難し、猛火につつまれた町並みをただぼう然と見るのみであった。

(4) 明治の津波から18年後の大惨事

この大火により小白浜、本郷の西部落で人家211戸が烏有（うゆう・全くないこと）に帰し、村有林は、百十余町歩を消失したのである。

明治29年の大津波から、18年後に起きた大惨事である。

(大火により樹皮のみで生きのびている
宇賀倉さまの桂の木→)



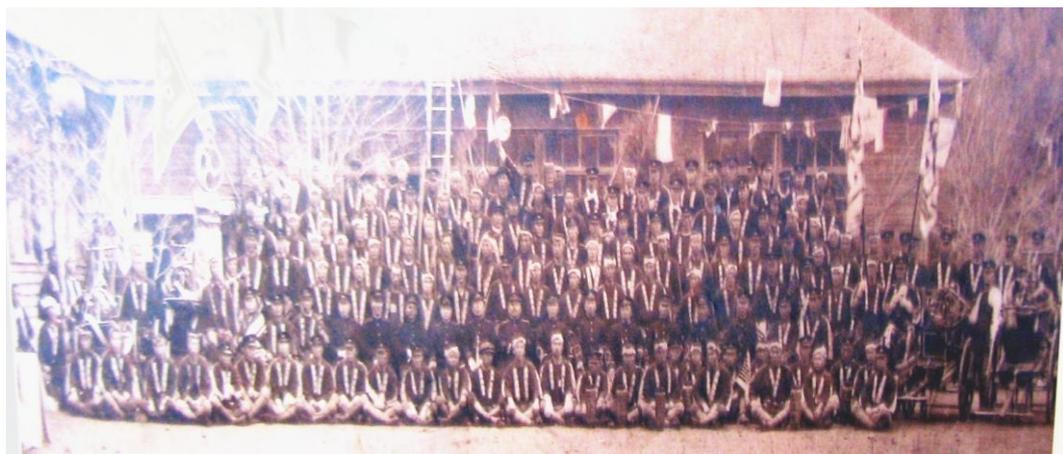
被害状態は、

地区	総戸数	消失家屋	総人口	死亡者
本郷	75	70	378	0
小白浜	150	141	681	14
村総計	416	211	2293	14であり、

死亡者14のうち柴琢治家は妻とも5人の死亡者を出した。これは、海上に避難した船が転覆しての事故である。

柴琢治氏は、この時丁度盛岡に出張していて、この難をのがれたという。

(当時の消防団結団記念写真：団長は柴琢治氏)



ちなみに、唐丹の消防団の発足は、大正9年2月で、消防自動車を初めて購入したのは昭和10年10月24日である。

(釜石市誌・唐丹小史資料編より引用)

<追記>

大火の体験談聞き取り者・再話著者・新沼裕

その1. 父政治郎の姉ナカノ伯母（明治37年生れ）9歳のころの話

学校サ行ったらば、朝からお寺の鐘がまるで鳴ってで、なんだべど思っただも、先生がいっこうに授業止めねえんだっけナ。



(昭和9年ころの盛岩寺)

そうしてるうちに煙が中サ入って来るようになって、火事だつて。煙があっちからも、こっからも出て、こんでわがんね。て言うことになって、昼前に家サ帰されたのサ。

母ナカノ晩年の話として4男高橋定男さんより

その2. 母ハルの兄石本一雄伯父（明治42年生れ）6歳のころの記憶

幸い大石には火がこなかったが、多くの家では家財道具など運び出した。

おらいでも、屋形の畑に家財道具や襖や障子を外して運んだナ。俺もそこに避難させられたが、小白浜の方は、火の海で、顔が熱くて、熱くて、煙がこっちまで流れて来て大変だったとの記憶がある……と。平成18年夏97歳の伯父が語った。



(大石より小白浜方面を望む)

その3. 大正2年大火の鎮火祈願歌・大石部落

この鎮火の祈願歌は、当時（明治45年4月～大正12年3月在職）の大石小学校校長菊池武毅先生が、大火による大石部落民の情態を歌にして残したものといわれています。

その後、永く埋もれていたものを、部落民が一体となった防火活動と大火の恐ろしさなどの情態を、さらに、後世へ伝承するために、昭和49年10月27日、「大石小学校創立100周年記念」式典に向けて、復刻しました。

と、当クラブ会長で、「昭和49年度から昭和56年度まで大石小学校在職の小原英氏」から提供されものです。

1. 大正2年 春4月 1日午前の十時ごろ 青島台に 火の煙 のぼると見えし そのうちに
2. ふきまく風に あふられて かなたこなたに もえうつる すわことここに おこれりと けいせい(注1) 響く60戸
3. かけつくものは わずかにて 腰はあずさの(注2) 老人か 肩上げまきの(注3) うらいなか(注4) 乳子をもりする 婦人のみ
4. 力とたのむ 壮夫らは 明けのカラスと もろともに 沖合い遠く漁労にと いでて一人も あらざりき
5. ますますすさぶ ぼううふうに あくまの如き ぜつ煙は 数十町歩を 時のまに 煙つくして 今は はや
6. 音すさまじく 笹畑の(注5) 山ものまんず 形勢に ふせがんすべも つきはてて 煙の風に おわれつつ
7. のがれ来たりし 一団の 老幼婦女は 寄りつどい こんびら堂にぬかずきて ただ ひたすらに 壮夫らの
8. 帰帆の程を 待ちわびぬ 神の知らせか あらざるか 根崎に見える黒煙は 丸一じるしの はつどうき
9. きょうきの涙 とめあいず 声張り上げて とくとくと 呼ばればお一と いらい(注6)して かしに着きしや 壮夫らは
10. 息おもつかず まっしぐら かけ声高く かけのぼる つづく下形川久保や 和形の船も 帰り来る
11. 十数名の 隣村の 応援人夫も かけつけて 共に防火に つとめしは 時これ午後の 三時頃
12. お寺の山に 飛び火して 三面猛火に つつまれぬ 防御のぶしょうあらためて 老幼婦女は 家の保護
13. だんなといわれる 人々は 気を八方に 配りつつ もっぱら指揮の任をとる 血気盛んな 青年は
14. ゆうげき隊を 組織して ひちょうの如く あれまわり あしゅらの如く かけめぐり きけんの場所に うちあたる
15. かくてそれぞれ その任務 極力つくし そのうちに 日も早やすでに くれはてて あびきょうかんの 戦争は
16. そう いっそうに くわりぬ かなたを消せば 又こなた 力の限り つくせしは よく日午前の 三時頃
17. 唐丹全村 全滅の この大火にも 大石の 部落の人家を 安全に保ちしものは これやこれ (完)

(注1) けいせい：警世。世に向って警告を発すること。

(注2) あずさ：梓・かばの木科の落葉高木。昔この木で弓を作ったという。ここでは、弓のように腰が曲がった老人という意味。

(注3) 肩上げまきの？：肩上げした着物

(小さい子供の着物を作るとき、肩上げしないと恰好がよくない。また、子供が少しぐらい大きくなっても肩上げを下ろせば着られるように作った。)

(注4) うらいなか：子ぐらいか

*したがって、「肩上げまきの、うらいなか」は、「肩上げ着物の、子ぐらいか」と推測されます。

(注5) 笹畑：小学校裏山付近の山の地名

参考の項 おわり

◎釜石の民話・第3集：竜神社

○話し手：曾根トシエさん／大曾根（宇賀倉さまの別当家）

○聴き手：加藤ムツさん／片岸

●再話著者：新沼 裕／本郷地区（唐丹・愛ちゃんネットパソコンクラブ）

●写真撮影者：同 上

●校正指導者：同 上

●再話完成：平成19年3月

*話し手：曾根トシエさん

・長男哲夫さんの情報（19年3月）も参考にしています。